

加茂遺跡南大溝地区に関する覚書 - 主要遺構の整理に向けて -

川畑 誠

1. はじめに

加茂遺跡は、石川県河北郡津幡町舟橋・加茂地内の沖積地に立地する縄文時代中期後半～中世の複合遺跡であり、南北約400m、東西約500mの範囲に広がる。本遺跡の調査は、津幡北バイパス(計11次。1991～2005。石川県教育委員会・(社)石川県埋蔵文化財保存協会(1991～94)・(財)石川県埋蔵文化財センター(1999～)。以下、県BP調査)、河北縦断道路(計7次。2005～11。以下、県縦断調査)、また津幡町教育委員会による保存を目的とした確認調査(計21次。2001～11。以下、町調査)がおこなわれ、報告書の刊行とともに様相が次第に明らかとなりつつある^{(1)～(6)}。

特に、奈良～平安時代前期の集落構造は、旧舟橋川兩岸の微高地に分水(南・北大溝)し、「北大溝地区」、「南大溝地区」とも建物域が長期間存続することを基本に推移する(第1図)。この兩大溝を介して西側の旧河北潟・舟橋フゴと東側の古代北陸道能登支路をつなぐ水陸交通の要衝として、いわゆる地方末端官衙を含む多様な機能をもつ遺跡と評され、その一端は重要文化財「加賀郡勝示札」や過所様木簡、「英太」、「鴨寺」、「曹」等の豊富な墨書土器等からも、うかがい知ることができる。

本校は、県BP報告書Ⅰ(県BP1～4次調査)に掲載された南大溝地区の主要遺構(南大溝、道路遺構(古代北陸道能登支路)、掘立柱建物群)について、県BP報告書Ⅱ(県BP5次調査)で紙面の関係から割愛した私見や課題の要旨を雑駁に書き記すものである。なお、県BP報告書Ⅰ掲載の変遷案は第1表⁽⁷⁾のとおりで、時期表示と暦年代は、第2表を参照されたい⁽⁸⁾。

2. 南大溝の変遷について

南大溝地区を南西方向に貫流する南大溝は、大きく南大溝(古)、南大溝(新)、県BP5次SD5061、南側流路、北側流路、県BP4次SX4003(大オチコミ)で構成される(第2図)。その変遷は、県BP報告書Ⅰで浜崎悟司氏が、(1)南大溝(古)段階(Ⅱ3期～Ⅳ2(新)期)：上流から県BP5次SD5061、南大溝(古)の流路(・北側流路には前身溝)→(2)上流域の埋め立て・付け替え(Ⅳ2(新)期末～Ⅴ1期初頭)→(3)南大溝(新)段階(Ⅴ1期～Ⅵ3期)：上流から県BP4次SX4003、南側・北側流路、南大溝(新)の流路という3つの段階に整理している。南地区掘立柱建物群の北限ラインを加味すれば、北側流路の前身溝の存在を含めて、おおむね首肯しうる変遷案と考える(第1表)。このうち、(1)から(2)の過程、(3)について、若干の修正を提起したい。



第1図 加茂遺跡の地区名称 (S=1/4,000)

第1表 県BP報告書Ⅰの加茂遺跡南大溝地区変遷表

土器の 時期	Ⅱ3	Ⅲ	Ⅳ1	Ⅳ2古	Ⅳ2新	Ⅴ1	Ⅴ2	Ⅵ1	Ⅵ2	Ⅵ3
遺跡の 変遷区分	1期					2期				3期
画期	画期1					画期2		画期3		廃絶
大型建物	SB35～38					SB71		SB73	SB72	SB28
大溝	古段階					埋立/付替		新段階		(埋没)
道路	旧側溝					新側溝				(最新?)

註(1) 文献から転載。一部改変。

まず、南大溝(古)から埋め立てまでの過程に関して、県BP報告書Ⅰには、ほぼ重複する南大溝(古)・(新)の土層堆積状況が掲載されている(第2図断面③～⑥)。南大溝(古)の上位堆積土(第2図薄い網掛け表示)は、遺構検出面の標高まで堆積し、断面

第2表 加賀・能登の古代土器編年と暦年代対比表

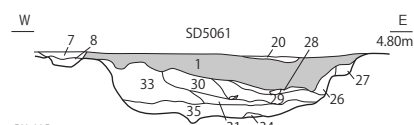
時期区分	想定年代	備考	暦年代	田嶋 明人 (2012)	出越 茂和 (1997a・b)	望月 精司 (2008・10)
I 期	6世紀末～7世紀中頃	飛鳥Ⅰ・Ⅱ	750	Ⅲ期		4A 期 (Ⅲ期新～Ⅳ ₁ 期(古))
Ⅱ ₁ 期	7世紀中葉後半	飛鳥Ⅲ		Ⅳ ₁ 期	上荒屋1期(Ⅳ ₁ 古期)	4B 期 (Ⅳ ₂ 期(古))
Ⅱ ₂ 期	7世紀末	飛鳥Ⅳ	800	Ⅳ ₂ 期(古) Ⅳ ₂ 期(新)	上荒屋2期(Ⅳ ₂ 期(古)) 上荒屋3期(Ⅳ ₂ 期(新))	5A 期 (Ⅳ ₂ 期(新)) 5B 期 (Ⅴ ₁ 期)
Ⅲ期	8世紀前葉	平城Ⅰ		Ⅴ ₁ 期	Ⅰ-1 期 (Ⅴ ₁ 期)	5C 期 (Ⅴ ₂ 期)
Ⅳ ₁ 期	8世紀中頃		850	Ⅴ ₂ 期	Ⅰ-2・3 期 (Ⅴ ₂ 期)	6A 期 (Ⅵ ₁ 期)
Ⅳ ₂ (古)期	8世紀後葉	長岡京		Ⅵ ₁ 期	Ⅰ-3・4 期 (Ⅵ ₁ 期)	6B 期 (Ⅵ ₂ 期)
Ⅳ ₂ (新)期	8世紀末～9世紀初頭		900	Ⅵ ₂ 期	Ⅱ-1 期 (Ⅵ ₂ 期)	6C 期 (Ⅵ ₃ 期)
Ⅴ ₁ 期	9世紀前葉			Ⅵ ₃ 期	Ⅱ-2 古期 (Ⅶ ₁ 期)	7A 期 (Ⅶ ₁ 期)
Ⅴ ₂ 期	9世紀中頃		950	Ⅶ ₁ 期	Ⅱ-2 新・3 期 (Ⅶ ₂ 期(古))	7B 期 (Ⅶ ₂ 期(古))
Ⅵ ₁ 期	9世紀後葉	K-90		Ⅶ ₂ 期(古)	Ⅲ-1・2 期 (Ⅶ ₂ 期(新))	7C 期 (Ⅶ ₂ 期(新))
Ⅵ ₂ 期	9世紀末～10世紀初頭		1000	Ⅶ ₂ 期(新)		8A 期 (中世Ⅰ-1 期)
Ⅶ ₁ 期	10世紀前葉	O-53		中世Ⅰ-1 期	Ⅳ ₁ 期 (中世Ⅰ-1 期)	8B
Ⅶ ₂ (古)期	10世紀中葉		1050			
Ⅶ ₂ (新)期	10世紀後葉					
Ⅷ ₁ 期	11世紀前葉					

※ 右表は、註(8) 文献より作成。

③で黄灰色砂質土(無遺物、間層)、断面⑤で褐黄色砂・黄灰色砂、断面⑥で濁黄灰色(間層)・黄灰色砂と記される。浜崎氏と同様に、これらの堆積土は短期間に流入・堆積した土砂とみるのが妥当と考える。また、第2図断面図との対応関係は判然としないが、県BP報告書Ⅰの遺物観察表で、南大溝(古)と記された土器(1002～07、1229、1247～50、1469～72、1601～13、1776・77、1830～41・43・44、1949・52・85・87、2101～23)は、Ⅱ₃期を主体に一部Ⅳ₁期初頭までの時期幅を示す。これら2点から、県BP報告書Ⅰの南大溝(古)は、県BP4次以東の流路に課題を残すものの、(1-a)Ⅳ₁期初頭に完全に埋没し、併せて南大溝地区の建物群も一時途絶した可能性を指摘しておきたい(建物群変遷は後述)。その後、(1-b)県BP5次SD5061から流下する新たな流路(仮に南大溝(中))を、下流域は南大溝(古)と重複する位置に開削し、(2)Ⅳ₂(新)期末～Ⅴ₁期頭にSD5061を含む流路の一部を埋め立てて(埋土：第2図断面④・⑦網掛け)、道路遺構西側溝を起点とする、より直線的な新流路(南大溝(新))に付け替えたと考える。

次に、南大溝(新)段階の南側・北側流路について触れたい。第2図のとおり、新しく開削した流路では、道路遺構西側溝を起点に、直線的な南側流路(延長約50m。上流から県BP4次SX4003・SD4019、県BP6次SD02、県BP5次大溝南側流路、県BP8次A区第1面SD2015、県BP3次遺構名なしを仮称)と、北側流路(延長約180m。上流から県BP4次SX4003・大溝、県BP6次SD01、県BP5次大溝北側流路、県BP8次SD2057、県BP1～3次大溝を仮称)が上記の流路を直線化した範囲で、2～3m隔てて並走するように検出されている。県BP報告書Ⅰでは、北側流路を南大溝(新)と、また南側流路を第1表2期(Ⅴ₁期～Ⅵ₂期)に属する耕作地(畠地)への用水路と評価し、南・北側流路間を通路と考える。北側流路を南大溝(新)とすることに異存はなく、ここでは南側流路の機能時期、性格を考えるため、改めて事実関係を整理したい。県BP4次SD4019は幅160cmを測り、土層断面で新(深)・旧(浅)を確認、覆土は粘土、粘質土(県BP報告書Ⅰ第90図土層8～10)となる。県BP5次調査では、北側流路を完掘した後に重複する位置で南側流路底付近を検出(県BP報告書Ⅱ第60図)、断面は逆台形を基調とする。覆土は緑灰～灰褐色粘質土であり、出土遺物はⅥ₂期を主体にⅥ₃期初頭頃を下限とする。また、県BP6次SD02は、重複する新旧2つの溝として検出、幅1～1.2m、深さ約20cm(旧)・約50cm(新)を測る。断面は逆台形状を呈し、粘質土を覆土とする。これらから、①南側流路は2度掘削され、流水痕跡のない粘質土が自然堆積し埋まること、②掘削時の断面形状を比較的良好に保持する状況から比較的短期のうちに埋没した可能性が高いこと、③南側流路は、新しい顕著な流水痕跡をもつ北側流路

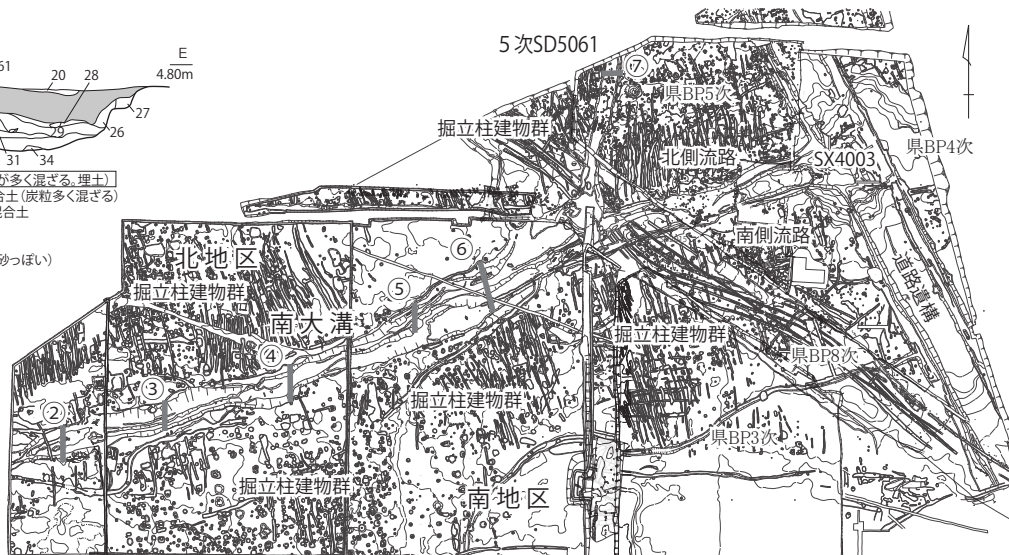
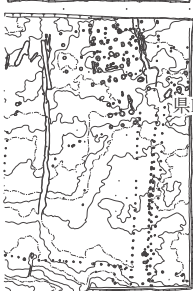
断面⑦ 5次SD5061



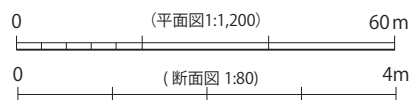
〔抜粋〕

1. 黒灰色粘質土 (炭粒・ベース土が多く混ざる。埋土)
20. ベース土と黒灰色粘質土の混合土 (炭粒多く混ざる)
26. ベース土と暗灰褐色粘質土の混合土
27. ベース土と同質土
28. 20層と29層の混合土
29. 灰褐色粘質土 (しまりなく、やや砂っぽい)
30. 淡黄灰色砂質土 (しまりない)
31. 褐色腐植土と粗砂の交互堆積層
33. 30層と同質土
35. 淡緑灰色細砂～粗砂

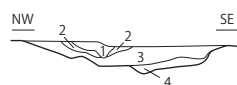
← 河北潟
(舟橋フコ)



※ 平面図は註 (1) 文献から転載。一部加筆。
断面図は註 (1)・(5) 文献を再トレース。

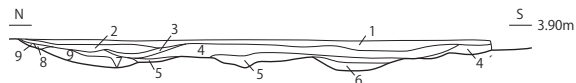


断面① (4区)



- 1 淡黄色粘質土 (炭粒含む)
- 2 褐色粘質土 (炭粒含む)
- 3 淡黄褐色粘質土 (炭粒含む)
- 4 黄灰色粘質土 (黄灰色砂が層状に入る)

断面② (D区)



- 1 黄灰色粘質土 (細炭粒含む)
- 2 黄灰色粘質土 (大きな炭粒含む)
- 3 淡黄褐色粘質土 (細炭粒含む)
- 4 淡黄褐色粘質土 (細、大の炭粒含む)
- 5 4層よりやや明るい色同層の可能性大
- 6 淡黄褐色砂 (粗砂が所々に見られる。細、大の炭粒含む)
- 7 淡黄褐色砂 (地山に近いやや粘質、炭粒ほとんどなし)
- 8 黄灰色砂 (土器多く含まれている)
- 9 灰褐色粘質土
- 10 黄灰色砂 (他の砂層に比べ粗い、炭粒少量入る)

※ 1層: 上層 2~4層: 下層 5~9層: 最下層

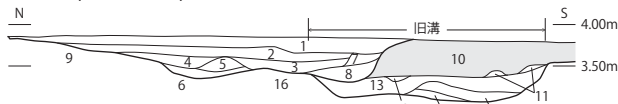
断面③

- 1 灰褐色細砂質土 (炭粒少し含む)
- 2 灰褐色細砂質土
- 3 褐色粘質土 (黄白色砂層入る)
- 4 黄褐色細砂質土
- 5 褐色粘質土
- 6 濁黄白色砂
- 7a 灰色砂 (褐色粘土層入る)
- 7b 灰色砂 (土器・炭粒入る)
- 7c 灰色砂 (褐色粘土層少し入る)
- 8 灰褐色細砂質土 (黄白色粘質土入る)
- 9a 灰緑色粗砂 (木片多く入る)
- 9b 灰緑色粗砂 (褐色粘土層多く入る)
- 10 灰緑色細砂
- 16 灰緑色粗砂 (腐植(木)物多く入る)
- 上 褐黄灰色砂
- 下 黄灰色砂
- 包 灰青色砂 (炭化物・加工木・土器器・須恵器・流木等)

断面④

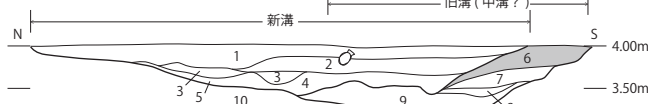
- 1 灰褐色細砂質土 (炭粒少し含む)
- 1a 1層より黒い
- 1b 1層より白
- 1c 1層より黒い
- 2a 2層+炭化物少
- 2b 2層+炭化物多
- 2c 2層+多量の白砂
- 2d 2層+3層
- 2e 2層よりうすい
- 2f 2層+3層と砂
- 3 黄褐色粘質土
- 3a 茶褐色粘質土 (青色砂ブロック入り、植物茎入り)
- 3b 3層+砂
- 3c 3層+4層
- 4 灰褐色砂質土 (やや白っぽい)
- 4a 4層より黒い
- 4b 4層とほぼ同じ
- 5 濁灰褐色粘質土
- 6 灰褐色砂
- 7 灰褐色粗砂
- 15 濁黄灰色砂 (間層、須恵器若干あり)
- 15a 15層よりやや黒っぽい
- 15b 15層に砂など混じる溝底の凹凸部分
- 16 黄灰色砂 (遺物ほとんどなし)
- 17 灰青色砂 (炭化物・須恵器・土器器・加工木・流木含む)

断面③(12ライン)



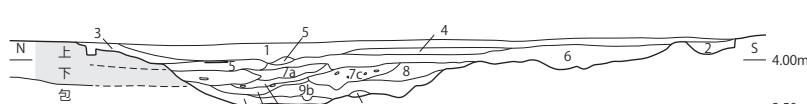
- 1 黄灰色粘質土 (炭化物、土器含む)
- 2 暗灰褐色砂質土 (炭化物、土器含む)
- 3 黄灰色砂質土 (遺物等含まない)
- 4 灰黄色砂
- 5 灰黄色砂 (4層より少し暗い)
- 6 灰色砂 (溝底、土器含む)
- 7 黄灰色粘質土
- 8 黄褐色粘質土
- 9 黄灰色砂質土 (遺物等含まない、地山)
- 10 黄灰色砂質土 (地山風、無遺物、間層)
- 11 淡褐色粘質土
- 12 淡褐色粘質土
- 13 黄灰色砂 (木片あり、土器含む)
- 14 褐色砂 (木片多い)
- 15 青灰色砂 (木片あり、溝底の砂層)
- 16 青灰色強粘質土 (地山)

断面④(14ライン)

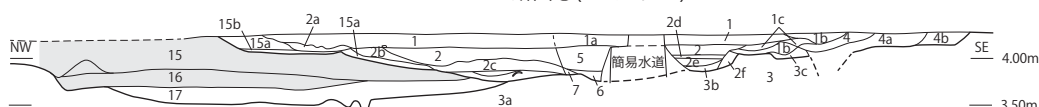


- 1 黄褐色砂質土 (炭化物、土器含む)
- 2 灰褐色砂質土 (1層より砂多い)
- 3 黄灰色砂 (炭化物少量)
- 4 茶褐色砂質土 (炭化物、木片、土器含む)
- 5 灰色砂 (3層とほぼ同じ)
- 6 黒褐色砂質土 (炭化物多量)
- 7 黄灰色砂 (細砂)
- 8 灰褐色強粘質土
- 9 灰黄色砂 (底に木片多い)
- 10 黄灰色強粘質土 (溝の地山)

断面⑤(16ライン)



断面⑥(17ライン)



第2図 南大溝平面図・土層断面図(S=1/1,200・1/80)

(南大溝(新))の埋没に先行して、遅くともⅥ3期初頭頃までに埋没したこと等が指摘できる。異なる機能を予想させる両流路が並走する景観は、Ⅵ2期を中心とした比較的短い期間であった可能性がある。いずれにしても、南大溝の最終的な変遷は、南大溝(中)・南大溝(新)・北側流路・南側流路が重複する県BP8次調査の報告を待つしかなく、現時点での試案として書き留めておきたい。なお、南大溝(新)の終焉をⅦ1期初頭頃と考えるが、道路遺構の変遷と併せて、次節で述べる。

3. 道路遺構について

東西両側に新旧2段階の側溝を伴う道路遺構は、県BP4・5・8次調査、町調査1・7次調査において直線延長約330m(N-27°W)を検出、古代北陸道能登支路と考えられている。県BP報告書Ⅰでは、路面を多量の板材・棒材で補強した砂・砂質土で盛土(最大厚約45cm)と報告、その変遷は、第1表のとおりである。今回、県BP4・5次調査の検討で、いくつかの所見が得られたため、改めて時系列に沿って記す。

旧側溝段階：南大溝(新)との接続箇所(SX4003付近)を境に、南北で溝心心距離が異なり、SX4003以南が9.0～9.8m、以北が8.1m前後(推定)を測る。これから、南大溝(新)に先立つ何らかの区画(溝か)が想定でき、この区画を境に敷設当初から路面幅が異なつたと考えられる。また、東旧側溝(底標高4.23～4.39m)は、SX4003以南の西旧側溝(同4.40～4.48m)に比して10～20cm深く(第3図)、東側丘陵方向からの雨水を考慮した妥当な工法といえる。敷設期は不明ながら、道路遺構と主軸方位が一致する県BP5次SI5001(第6図。道路遺構の維持施設か)からⅣ2(古)期まで確実にさかのぼる。

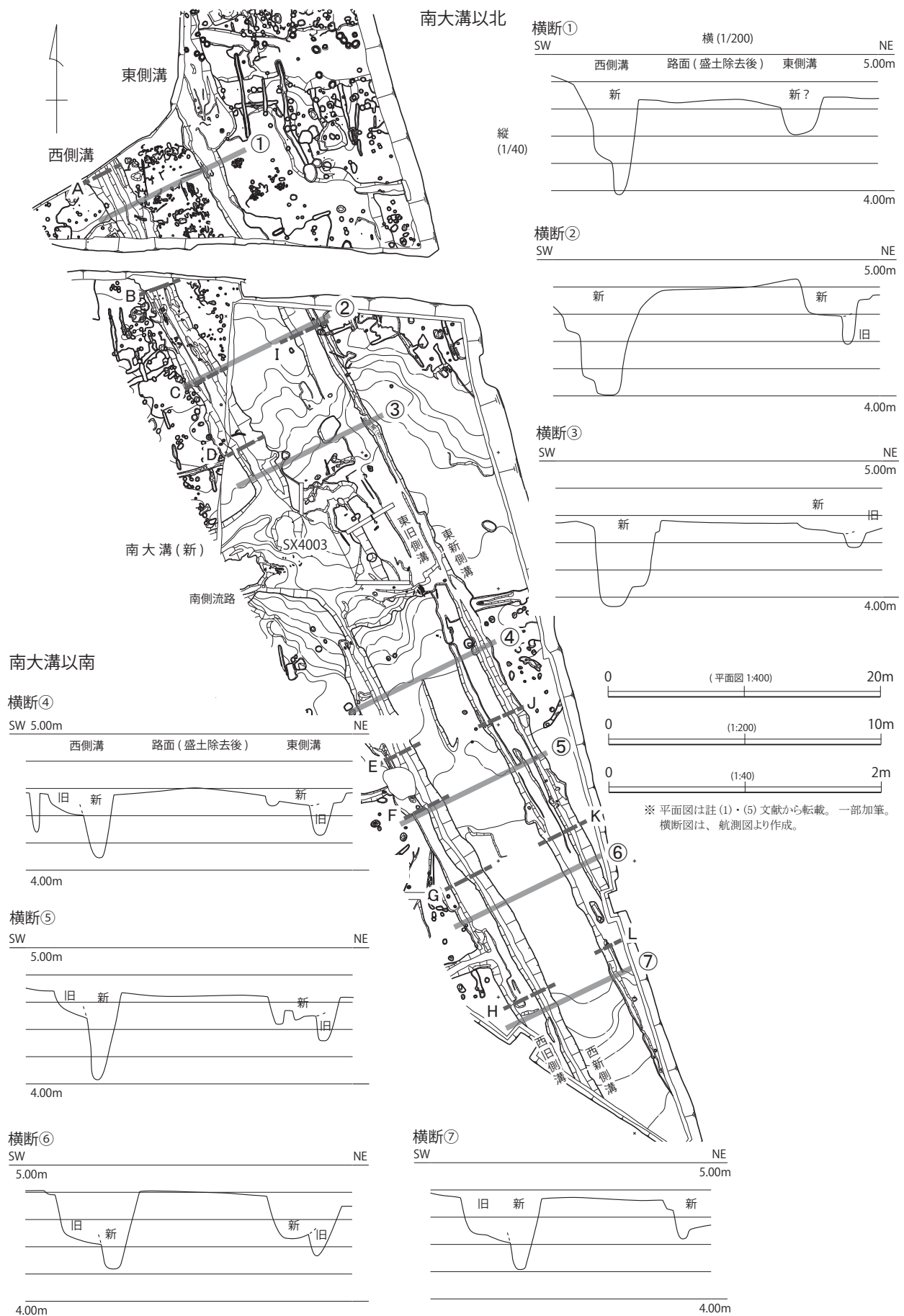
路面幅の縮小：東新側溝(底標高4.38～4.61m)は、西側(路面側)に寄って一体的に掘られる。一方、西新側溝は、南大溝(新)との接続箇所(SX4003付近)を境に南北で縮小方法が異なる。SX4003以南の西新側溝が、東新側溝と同様に路面寄りに新掘するのに対して、SX4003以北の西新側溝は旧側溝と同位置に掘られる。西旧側溝廃絶後の堆積土出土の遺物(第5図)は、Ⅴ1期(0747・48・51)とⅥ2期(0744・45・49)にまとまりをもつ。この路面幅の縮小期については、前述のとおり南大溝の付け替えと一体となるⅤ1期頃と考えられる。

新側溝機能段階：両側溝の最終期(調査検出時)の状況から、両側溝間に機能、廃絶期の差異が指摘できる。機能差は、両新側溝底の標高に端的に現れ、東新側溝が4.38～4.61m、SX4003以南の西新側溝が4.03～4.22m、SX4003以北の西新側溝が3.94～4.01mを測る。西新側溝は、東新側溝よりかなり深く掘られ、南大溝(新)に流下する基幹水路機能を兼ねたものと理解する⁽⁹⁾。

路面の改修(盛土)：県BP4次路面出土遺物(第5図)のうち、須恵器有台埴0890・0892を含めてⅥ2期末頃を下限とし、県BP5次路面出土遺物は多くがⅥ2期に属する。遺物の時期的まとまりから、Ⅵ2期末頃に盛土を伴う大規模な路面の改修がおこなわれ、その際には、盛土補強材として木材に加えて、多量の須恵器貯蔵具を含む土器片を用いる。

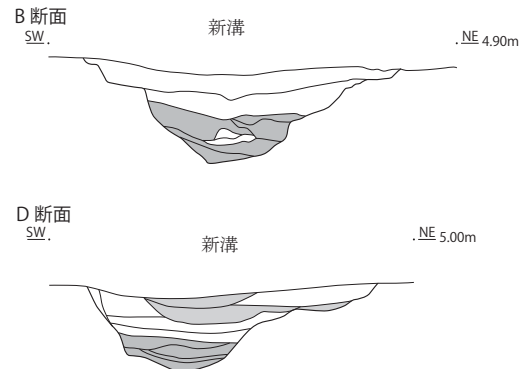
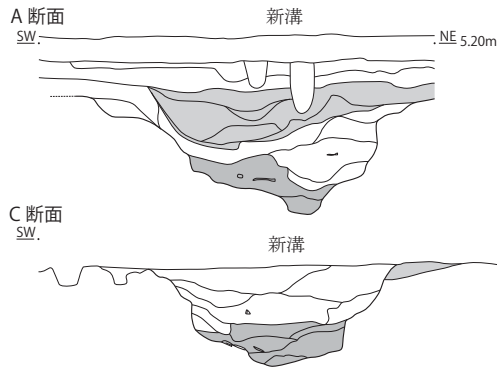
新側溝埋没段階：両側溝の堆積土、出土遺物の時期が異なるため、前述の機能差を反映した埋没(廃絶)時期の差を指摘したい。東新側溝は、主に粘質土が堆積(第4図)、出土遺物はⅥ2期を下限とする。一方、西新側溝は、流水に伴う粗砂・砂層(第4図濃い網掛け)、道路盛土(砂・砂質土)の流出土層(同図淡い網掛け)が顕著に確認できる。出土遺物はⅥ2期を主体に、県BP5次西新側溝上位層および南大溝(新)にⅥ3期の土師器が少量混ざる。これらから、前述の大規模な路面改修後、ほどなく東新側溝の埋没(官道としての維持管理の放棄)が急速に進み、基幹水路として維持された西新側溝・南大溝(新)もⅥ3期には埋没過程(=路面盛土の流出)に入ったと考えられる。なお、県BP4次SX4003は、西新側溝の基幹水路機能と自然災害との係りで位置付けたいが、定見を得ていない。

「盛土層」道路段階：県報告書Ⅰでは、新側溝をもつ官道より新しい「盛土層」道路を想定するが、前

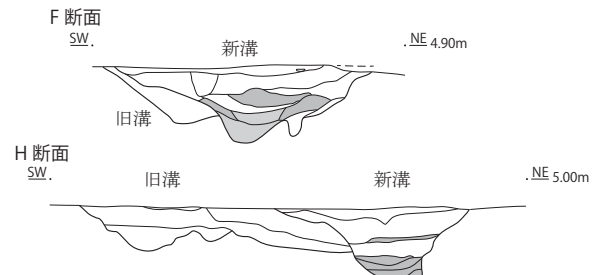
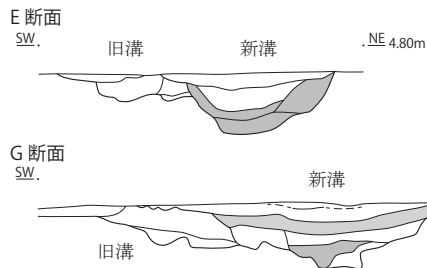


第3図 道路遺構平面図・横断面図 (S=1/400・1/200・1/40)

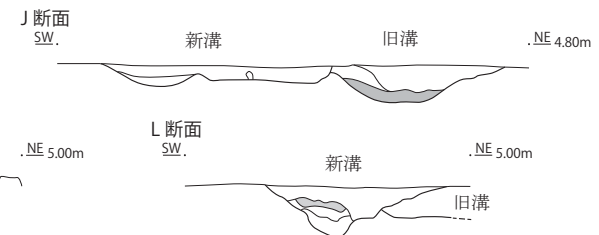
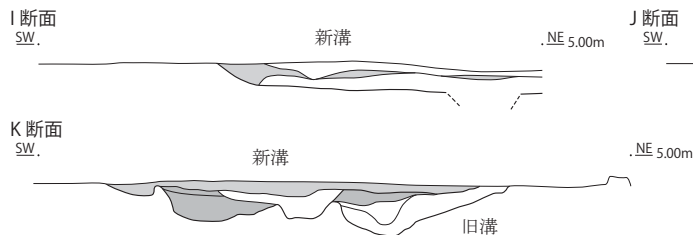
西側溝（SX4003 以北）



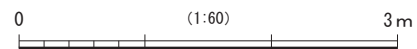
西側溝（SX4003 以南）



東側溝



※ 網掛けは、粗砂層、砂層、多くの砂が混ざる土層を示す。註(1)・(5)文献から作成。



第4図 道路遺構土層断面図（S=1/60）

述の路面盛土の流出と、耕土直下による土壌硬化として整理したい。ただし、道路機能の維持は続くものとする。従前からの南大溝地区の土地区画は、地区全体が耕作地(畠地)に転ずるⅦ期まで継承される。

4. 掘立柱建物群の変遷について

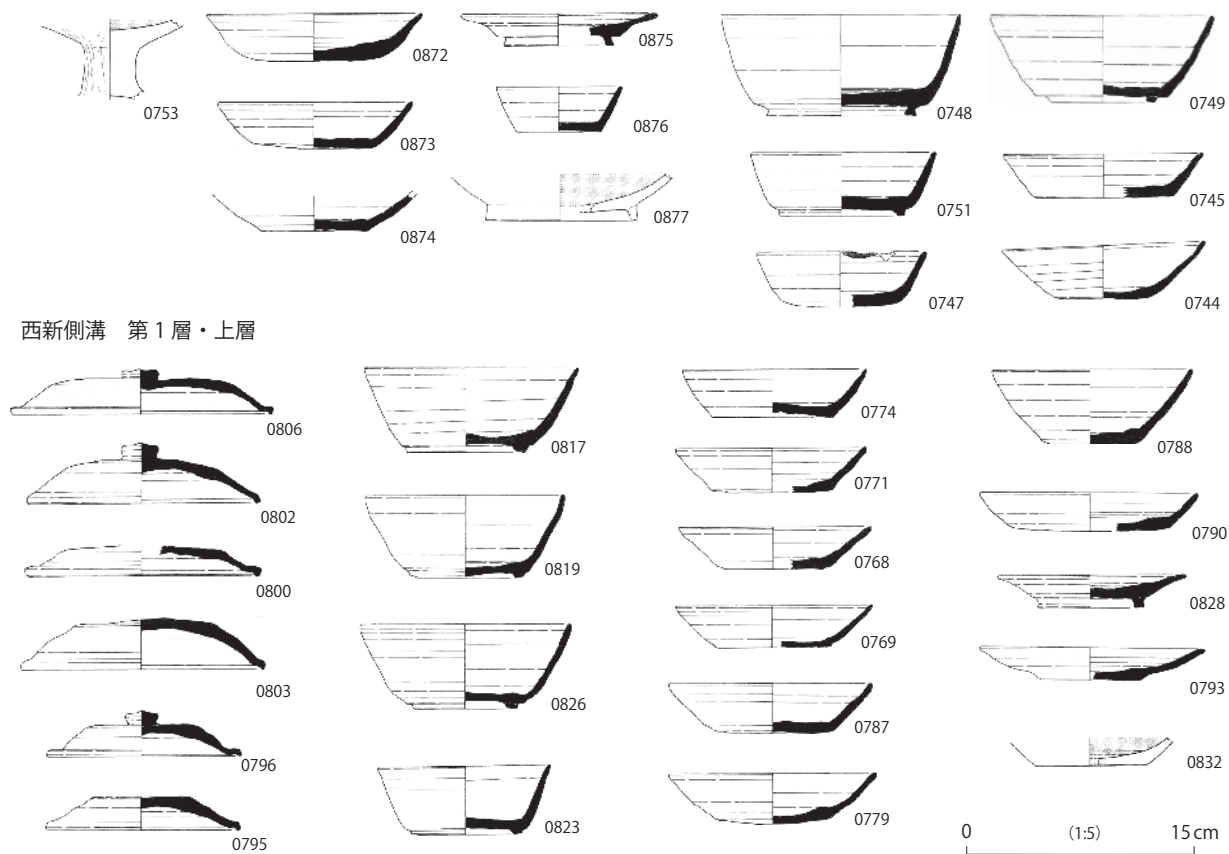
南大溝の両岸に展開する県BP1～4次調査の掘立柱建物群については、浜崎、田嶋明人両氏の建物の復元案および変遷案を紹介する。両氏の案に、県5次調査建物を加えたものを、第3表、第6～9図に示した⁽¹⁰⁾が、両氏の見解は大きく異なり、南大溝地区の評価に直結する重要な課題と考える。

浜崎氏は、南・北区で82棟(うち6棟は中世)を復元する(第3表)。南区の柱穴が密集する3ヶ所の建物復元(SB35～38建物群、SB46～49建物群、SB64～66建物群)に保留部分を残しつつも、大型建物主軸方位のまとまりや柱穴出土遺物の検討から、4つの期(浜崎1～3期、第1表)に建物群変遷を整理する(第6・7図)。田嶋氏が長舎の主屋級建物とした柱穴群を建物の重複と理解した復元案であり、結果として比較的小規模な建物が主屋級となる。浜崎1期(Ⅲ～Ⅳ2(新)期)は、Ⅲ期に南大溝地区両岸(南・北地区)で建物が成立する。南地区全体としてSB35～38建物群を中心に、複数の比較的小規模な建物グループ(側柱倉庫・雑舎主体。N-4～15°W)が成立・併存する大きな盛期との評価となろう。主屋級建物は、重複するSB35(側3×3間、55.7㎡)、SB36(側5×3間、78㎡)、SB37(側4×

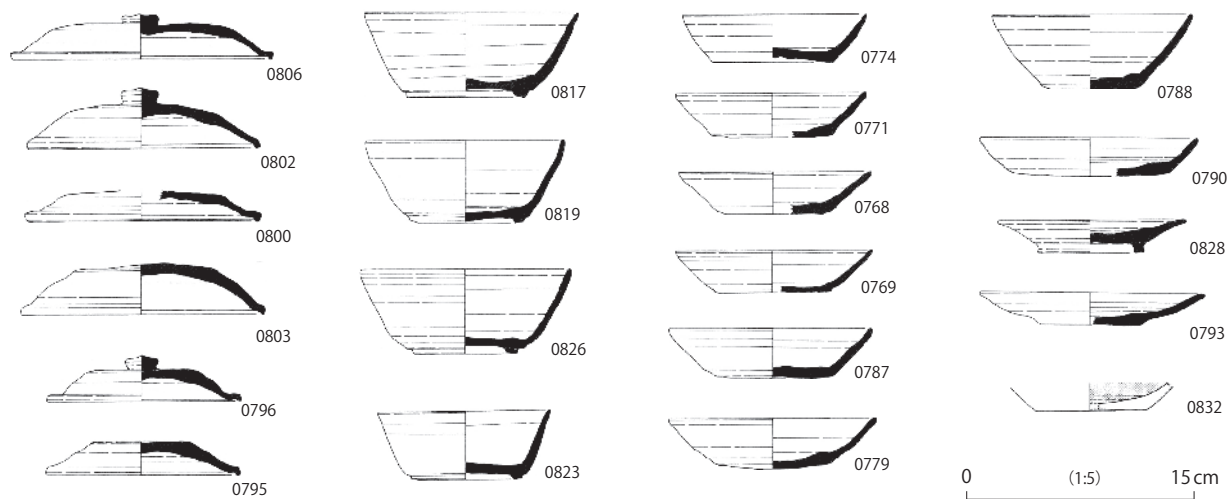
東旧側溝

東新側溝 第1層

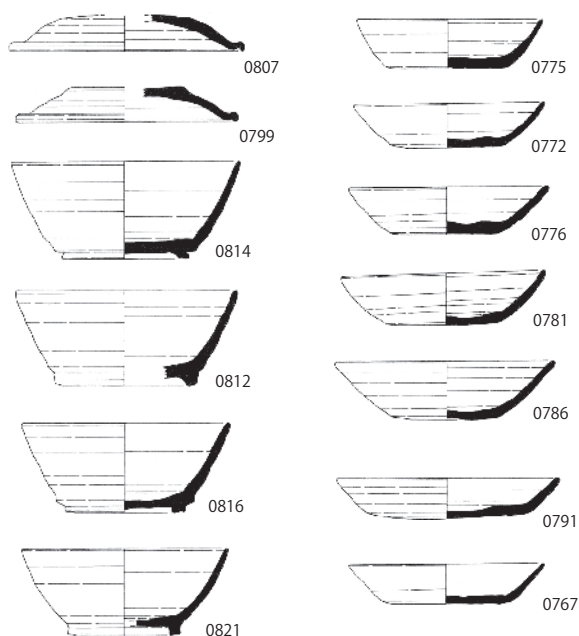
西旧側溝



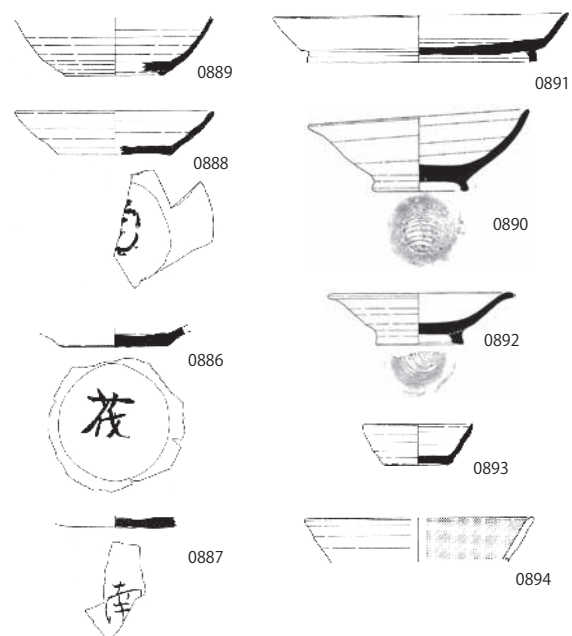
西新側溝 第1層・上層



西新側溝 第2層・下層



路面盛土



第5図 第4次調査道路遺構出土遺物実測図(S=1/5)

2 間、55.4㎡)、SB38(側 4 × 3 間、62.9㎡)、SB66(側 3 × 2 間、43.5㎡)があり、特徴的なSB07(総 3 × 3 間、67.6㎡)は、金沢市八日市サカイマツ遺跡SB19(49㎡)に類するプランをもつ。

浜崎 2 期(N-15~23°W)は、主屋級の建物のみ 2 期前半(おおむね V 期)、2 期後半(同 VI 1 期・VI 2 期)

第3表 南大溝地区の掘立柱建物対比表

※ 網掛け、太文字は、田嶋氏によるプラン等の変更を示す。

遺構名	プラン 区分	主柱 構造	柱配置 (桁×梁)	床面積 (㎡)	桁行 (m)	梁間 (m)	主軸方位	県Ⅰ 時期	町時期
SB01		総柱	3×3間	55.2	7.62	7.25	N-3° 東	中世	-
[SB01]	変更	総柱	3×2間	35.8	7.62	4.70	N-3° 東	-	12c～
SB02	一致	総柱	4×2間	32.8	7.68	4.27	N-11° 東	中世	12c～
SB03	一致	総柱	5×4間	109.7	11.58	9.47	N-2° 東	中世	12c～
SB04		総柱	4×4間	98.6	9.97	9.89	N-1° 西	中世	-
[SB04]	変更	総柱	5×4間	123.2	12.46	9.89	N-1° 西	-	12c～
SB05		総柱	3×2間	24.5	5.68	4.31	N-83° 東	中世	-
[SB05]	変更	総柱	2～×1～間	-	4.30～	1.87～	N-7° 西	-	12c～
SB06	一致	総柱	3×2間	31.0	6.58	4.71	N-4° 東	中世	12c～
SB07		総柱	3×3間	67.6	8.39	8.06	N-85° 東	1期	-
[SB07]	変更	側柱	4×2間	55.4	9.90	5.60	N-85° 東	-	3段階①-2
SB08	一致	側柱	2×1間	14.0	4.84	2.90	N-82° 東	1期	3段階①-2
SB09	未検討	側柱	2×1間	7.8	3.20	2.45	N-72° 東	2期	(未検討)
SB10		側柱	4×2間	32.1	6.30	5.10	N-7° 西	1期	-
SB34		側柱	2～×1間	24.2～	4.47～	5.41	N-7° 西	1期	-
[SB10]	変更	側柱	2×1間	14.3	5.10	2.80	N-83° 東	-	3段階①-3
[SB34]	変更	側柱	3～×2間	42.2～	7.80～	5.41	N-7° 西	-	3段階①-3
SB11	一致	側柱	3×2間	28.5	5.94	4.80	N-9° 西	1期	3段階①-3
SB12		側柱	2～×2間	18.9～	4.36～	4.33	N-15° 西	1期	-
[SB12]	変更	総柱	2×2間	18.9	4.36	4.33	N-15° 西	-	3段階②
SB13	(なし)	側柱	2×2間	18.3	4.37	4.19	N-75° 東	1期	(記載なし)
SB14		側柱	2×2間	16.6	4.36	3.80	N-78° 東	1期	-
[SB14]	変更	総柱	2×2間	16.6	4.36	3.80	N-78° 東	-	3段階②
SB15		側柱	2×1間	9.5	4.02	2.38	N-13° 西	1期	-
[SB15]	変更	総柱	2？×2間	9.5～	2.38～	4.02	N-77° 東	-	3段階①-3
SB16		側柱	2×1間	7.9	3.70	2.14	N-14° 西	1期	-
[SB16]	変更	総柱	2？×2間	7.9～	2.14～	3.70	N-76° 東	-	3段階①-3
SB17	一致	総柱	2×2間	13.3	3.68	3.61	N-81° 東	1期	3段階①-3
SB18	未検討	側柱	3×2間	18.9	4.72	4.01	N-2° 西	3期	(記載なし)
SB19	未検討	側柱	1～×1間	4.1～	2.14	1.94	N-2° 西	3期	(記載なし)
SB20	未検討	側柱	3×2間	31.4	6.10	5.15	N-6° 西	1期	(記載なし)
SB21	未検討	側柱	2×1間	13.1	5.40	2.42	N-4° 西	1期	(記載なし)
SB22	一致	総柱	2×2間	22.7	4.84	4.69	N-81° 東	1期	3段階①-3
SB23	一致	総柱	2×2間	23.5	5.13	4.59	N-89° 東	3期	2段階
SB24	一致	総柱	2×2間	20.2	4.92	4.11	N-89° 東	1期	3段階①-1
SB25	一致	側柱か	3×？間	-	7.06	-	N-89° 東	3期	2段階
SB26		総柱	2×3間	10.0	3.29	3.05	N-0°	3期	-
[SB26]	変更	側柱	1×1間	10.0	3.29	3.05	N-0°	-	3段階①-1
SB27	一致	総柱	2×2間	14.4	3.81	3.79	N-0°	3期	3段階①-1
SB28	一致	側柱	4×3間	53.2	8.98	5.92	N-89° 西	3期	2段階
SB29		側柱	2×2間	14.2	3.85	3.68	N-1° 西	3期	-
[SB103]	変更	総柱	2×2間	14.2	3.85	3.68	N-1° 西	-	12c～
SB30	未検討	側柱	3×2間	28.2	6.64	4.25	N-4° 西	1期	(記載なし)
SB31	未検討	側柱	4×2間	31.2	7.42	4.21	N-9° 西	1期	(記載なし)
SB32	未検討	側柱	3×2間	23.8	5.44	4.38	N-8° 西	2期	(記載なし)
SB33	未検討	側柱	3×2間	30.0	6.22	4.83	N-14° 西	2期	(記載なし)
S B 35 38 建物群	SB35		側柱	3×3間	55.7	8.72	N-7° 西	1期	-
	SB36		側柱	5×3間	78.0	12.58	N-7° 西	1期	-
	SB37		側柱	4×2間	55.4	9.13	N-4° 西	1期	-
	SB38		側柱	4×3間	62.9	9.67	N-8° 西	1期	-
[SB35]	変更	側柱	3×1？間	17.4	6.20	2.80	N-82° 東	-	3段階①-3
	[SB36]	変更	側柱	7×2間	111.8	17.2	N-8° 西	-	3段階①-3
SB39	未検討	側柱	4×2間	23.8	5.43	4.38	N-25° 西	2期	(記載なし)
SB40	一致？	総柱	3×2間	17.9	4.41	4.05	N-80° 東	1期	3段階①-2
SB41		側柱	2×2間	12.1	3.64	3.32	N-5° 西	1期	-
[SB41]	変更	総柱	2×2間	12.1	3.64	3.32	N-5° 西	-	3段階①-1
SB42		側柱	2×2間	30.3	5.50	5.50	N-6° 西	1期	-
[SB42]	変更	側柱	5×2間	54.5	9.90	5.50	N-5° 西	-	3段階①-2
SB43		側柱	3×2間	33.4	6.23	5.36	N-7° 西	1期	-
[SB43]	変更	側柱	6×2間	71.3	13.30	5.36	N-7° 西	-	3段階①-2
SB44		側柱	3×2間	33.6	6.97	4.82	N-8° 西	1期	-
[SB44]	変更	側柱	1～×2間	-	2.30～	4.82	N-8° 西	-	3段階①-2
SB45		側柱	3？×2間	約35	6.00	約5.80	N-6° 西	1期	-
[SB45]	変更	側柱	3～×2間	35～	6.00	約5.80	N-3° 西	-	3段階①-1
SB50	一致か	側柱	3×1間	24.5	5.94	4.13	N-11° 西	1期	3段階①-3

遺構名	プラン 区分	主柱 構造	柱配置 (桁×梁)	床面積 (㎡)	桁行 (m)	梁間 (m)	主軸方位	県Ⅰ 時期	町時期
S B 46 49 建物群	SB46		側柱	4×3間	43.7	8.82	N-14° 西	2期前	-
	SB47		側柱	5×3間	55.2	10.71	N-15° 西	2期前	-
	SB48		側柱	3×2間	34.0	6.74	N-16° 西	2期前	-
	SB49		側柱	3×3間	27.8	5.34	N-17° 西	2期前	-
	[SB47]	変更	側柱	5～×2？間	-	10.71	N-15° 西	-	3段階②
	[SB48]	変更	側柱	7？×2間	72.8	13.9	N-16° 西	-	3段階②
SB51	一致	側柱	3×2間	25.1	5.67	4.42	N-11° 西	1期	3段階①-3
SB52	一致	側柱	3×2間	27.0	5.96	4.53	N-5° 西	1期	3段階①-2
SB53	一致	総柱	2×2間	11.4	3.52	3.25	N-74° 東	2期	3段階②
SB54	一致	総柱	2×2間	13.0	3.82	3.41	N-77° 東	1期	3段階②
SB55	一致	総柱	3×2間	12.3	3.72	3.31	N-70° 東	2期	3段階②
SB56		側柱	4×1間	16.8	5.29	3.17	N-75° 東	1期	-
[SB56]	変更	側柱	2×1間	8.6	2.70	3.17	N-74° 東	-	3段階②
SB57		側柱	2×2間	11.5	3.68	3.13	N-68° 東	2期	-
[SB57]	変更	総柱	2×2間	11.5	3.68	3.13	N-68° 東	-	3段階②
SB58		側柱	2×2間	11.9	3.47	3.43	N-4° 西	古代・不明	-
[SB58]	変更	総柱	2×2間	11.9	3.47	3.43	N-4° 西	-	3段階①-1
SB59	一致か	側柱	2×1間	13.8	3.84	3.60	N-76° 東	古代・不明	3段階②
SB60		側柱	2×2間	12.2	3.55	3.43	N-88° 東	3期	-
[SB60]	変更	総柱	2×2間	12.2	3.55	3.43	N-88° 東	-	3段階①-1
SB61	一致	側柱	2×1間	11.9	3.71	3.21	N-16° 西	2期	3段階②
SB62	一致	側柱	1×2間	16.3	4.54	3.60	N-87° 東	3期	3段階①-2
SB63	一致	側柱	1×2間	17.1	4.36	3.92	N-89° 東	3期	3段階①-1
S B 64 66 建物群	SB64		側柱	2×2間	32.1	6.14	N-69° 東	2期後	-
	SB65		側柱	3×3-2間	36.4	6.30	N-15° 西	2期後	-
	SB66		側柱	3×2間	43.5	7.81	N-18° 西	1期	-
	[SB65]	変更	側柱	6×2間	80.6	13.90	N-17° 西	-	3段階②
SB67	一致	側柱	3×2間	19.0	5.00	3.79	N-15° 西	1期	3段階②
SB68	一致	側柱	2×2間	13.6	3.96	3.43	N-82° 東	1期	3段階①-3
SB69	(なし)	側柱？	2×2間	19.4	4.41	4.39	N-16° 西	1期	(記載なし)
SB70	(なし)	側柱	2×1間	21.4	4.88	4.38	N-15° 西	2期	(記載なし)
SB71	一致	側柱	4×2間	49.7	9.38	5.30	N-76° 東	2期前	(記載なし)
SB72	一致か	側柱	3×2間	31.3	6.08	5.15	N-19° 西	2期後	3段階②
SB73	(なし)	側柱	4×2間	38.6	7.49	5.15	N-16° 西	2期後	(記載なし)
SB74	(なし)	側柱	2×1間	12.9	4.40	2.93	N-15° 西	2期前	(記載なし)
SB75	(なし)	側柱	3×1間	20.4	5.15	3.96	N-22° 西	古代・不明	(記載なし)
SB76	一致	側柱	3×1間	31.2	7.83	3.99	N-16° 西	2期	3段階②
SB77	未検討	側柱	2×2間	30.1	5.63	5.34	N-5° 西	1期	(記載なし)
SB78		側柱	4×2間	26.5	7.09	3.74	N-23° 西	2期	-
[SB78]	変更	側柱	3×2間	19.4	5.20	3.74	N-23° 西	-	3段階②
SB79		側柱	2×2間	13.2	3.67	3.61	N-13° 西	2期	-
[SB79]	変更	総柱	2×2間	13.2	3.67	3.61	N-13° 西	-	3段階②
SB80	一致	総柱	2×2間	17.7	4.60	3.85	N-13° 西	2期	3段階②
(SB81)	(なし)	側柱	5×3間	68.5	10.32	6.64	N-73° 東	2期	(記載なし)
SB82	一致か	側柱	2×2間	19.1	4.67	4.08	N-18° 西	2期	3段階②
SB101	追加	総柱	3×2間	26.7	6.20	4.30	N-1° 東	-	12c～
SB102	追加	側柱	3×2間	27.5	6.40	4.30	N-84° 西	-	12c～
SB104	追加	側柱	1×1間	9.0	3.00	3.00	N-10° 東	-	12c～
SB105	追加	側柱	3×2間	30.6	6.00	5.10	N-10° 西	-	3段階①-3
SB106	追加	側柱	2×1～間	-	3.30	-	N-73° 東	-	3段階②
SB107	追加	総柱	2×1～間	-	3.60	-	N-15° 西	-	3段階②
SB108	追加	側柱	2×？間	-	3.60	-	N-2° 西	-	3段階①-3
SB109	追加	側柱	2×？間	-	3.30	-	N-1° 西	-	3段階①
SI5001	5次	-	堅穴建物	10.7	3.35	3.2	N-25° 西	1期	3段階①-2
SB501	5次	側柱	3～×2間	32～	6.15～	5.20	N-3° 西	3期	3段階②
SB502	5次	側柱	3～×1間	30.5～	6.35～	4.80	N-1° 西	3期	3段階②
SB503	5次	側柱	1×1間	9.4	3.25	3.00	N-15° 西	2期前	3段階①-3
SB504	5次	側柱	3×2間	17.9	4.70	3.80	N-15° 西	2期前	3段階①-3
SB505	5次	側柱	1×1間	8.3	3.70	2.25	N-76° 東	2期後	3段階②
SB506	5次	側柱	3×2間	17.6	4.90	3.60	N-14° 西	2期後	3段階②
SB507	5次	側柱	1×1間	11.1	3.30	3.45	N-15° 西	2期後	3段階②
SB508	5次	側柱	2×2間	19.0	5.00	3.80	N-17° 西	2期後	3段階②
SB509	5次	側柱	2×1間	14.0	4.00	3.50	N-12° 西	2期後	3段階②
SB510	5次	総柱	3×2～間	37.3～	8.30	4.50～	N-12° 西	2期後	3段階②
SB511	5次	側柱か	？×2間	-	-	3.90	N-12° 西	2期後	3段階②

県BP報告書Ⅰ 1期(Ⅲ～Ⅳ²(新)期)

建物主軸方位 N-5～15°W

SB07: 総3×3間(67.6㎡)

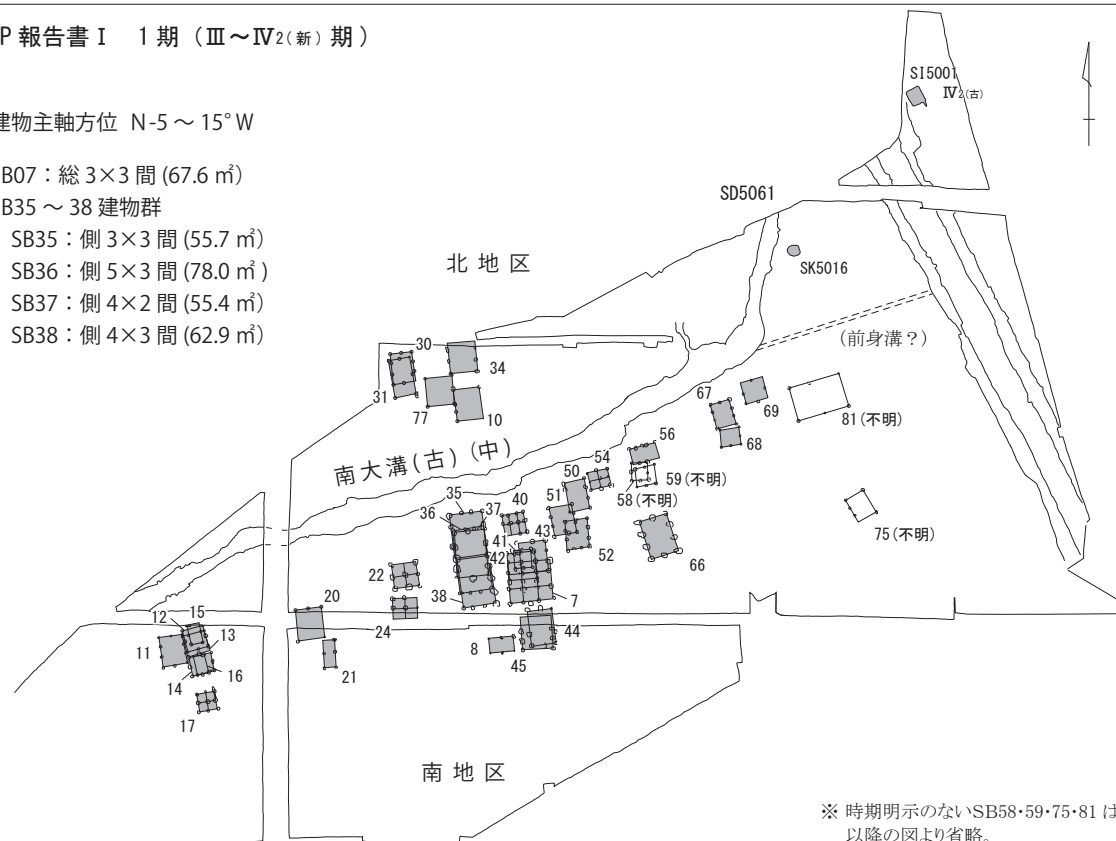
SB35～38建物群

SB35: 側3×3間(55.7㎡)

SB36: 側5×3間(78.0㎡)

SB37: 側4×2間(55.4㎡)

SB38: 側4×3間(62.9㎡)



※ 時期明示のないSB58・59・75・81は、以降の図より省略。

県BP報告書Ⅰ 2期前半(V期)

建物主軸方位 N-15～26°W

SB46～49建物群、SB71はN-14～17°W

SB46～48建物群

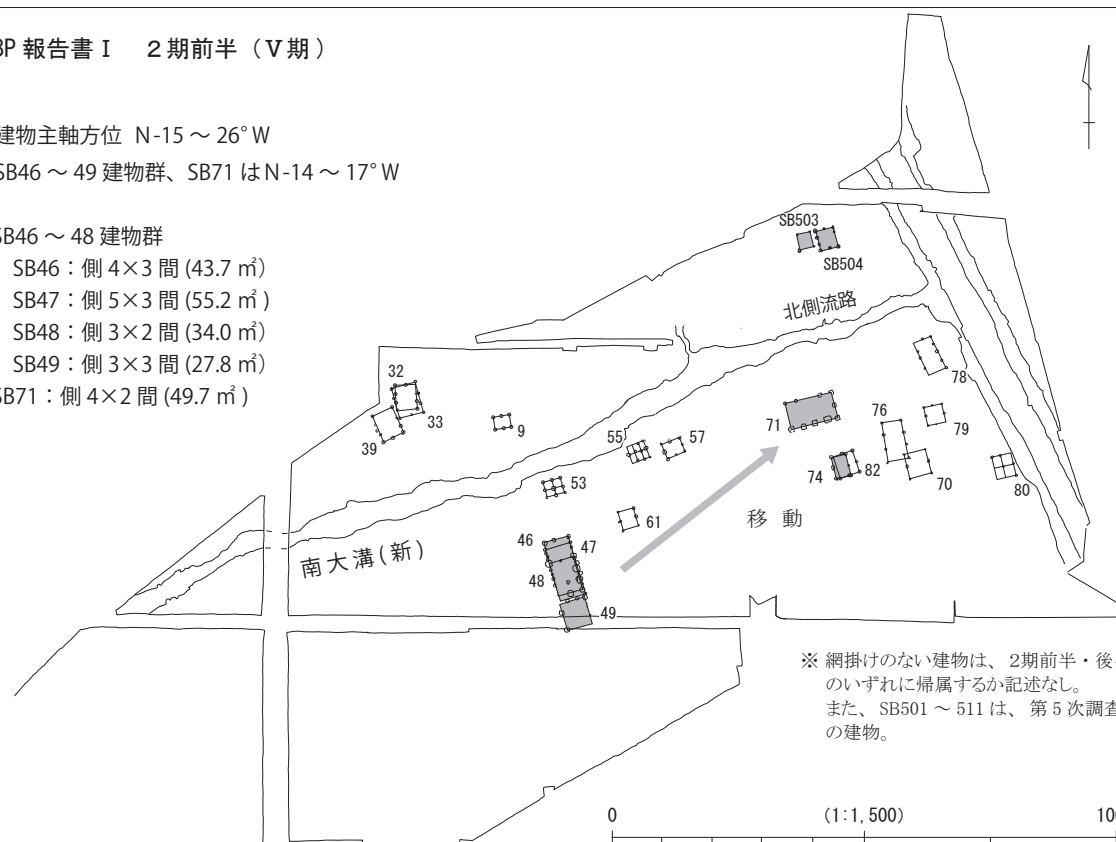
SB46: 側4×3間(43.7㎡)

SB47: 側5×3間(55.2㎡)

SB48: 側3×2間(34.0㎡)

SB49: 側3×3間(27.8㎡)

SB71: 側4×2間(49.7㎡)



※ 網掛けのない建物は、2期前半・後半のいずれに帰属するか記述なし。
また、SB501～511は、第5次調査の建物。

第6図 南大溝地区の県BP報告書Ⅰ変遷案1(S=1/1,500)

県 BP 報告書 I 2 期後半 (VI₁ ~ VI₂ 期)

建物主軸方位 N-15° ~ 23° W

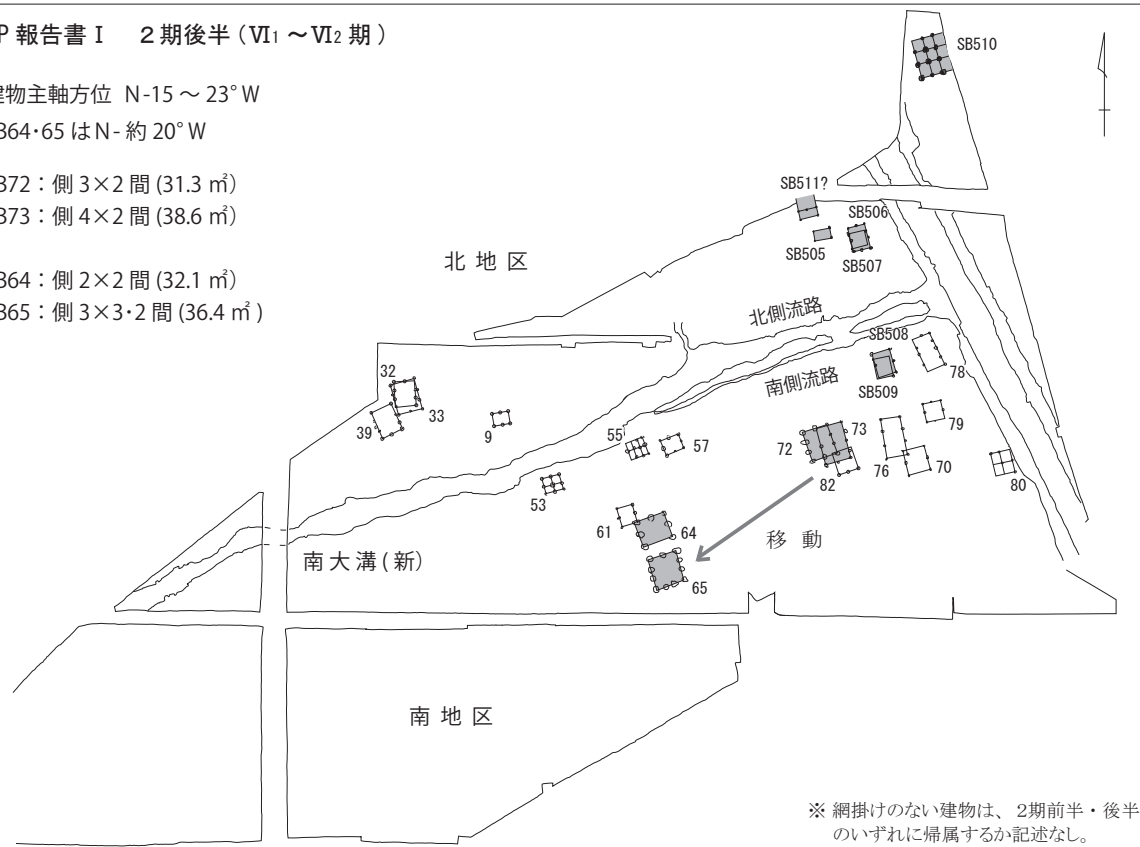
SB64・65 は N- 約 20° W

SB72 : 側 3×2 間 (31.3 m²)

SB73 : 側 4×2 間 (38.6 m²)

SB64 : 側 2×2 間 (32.1 m²)

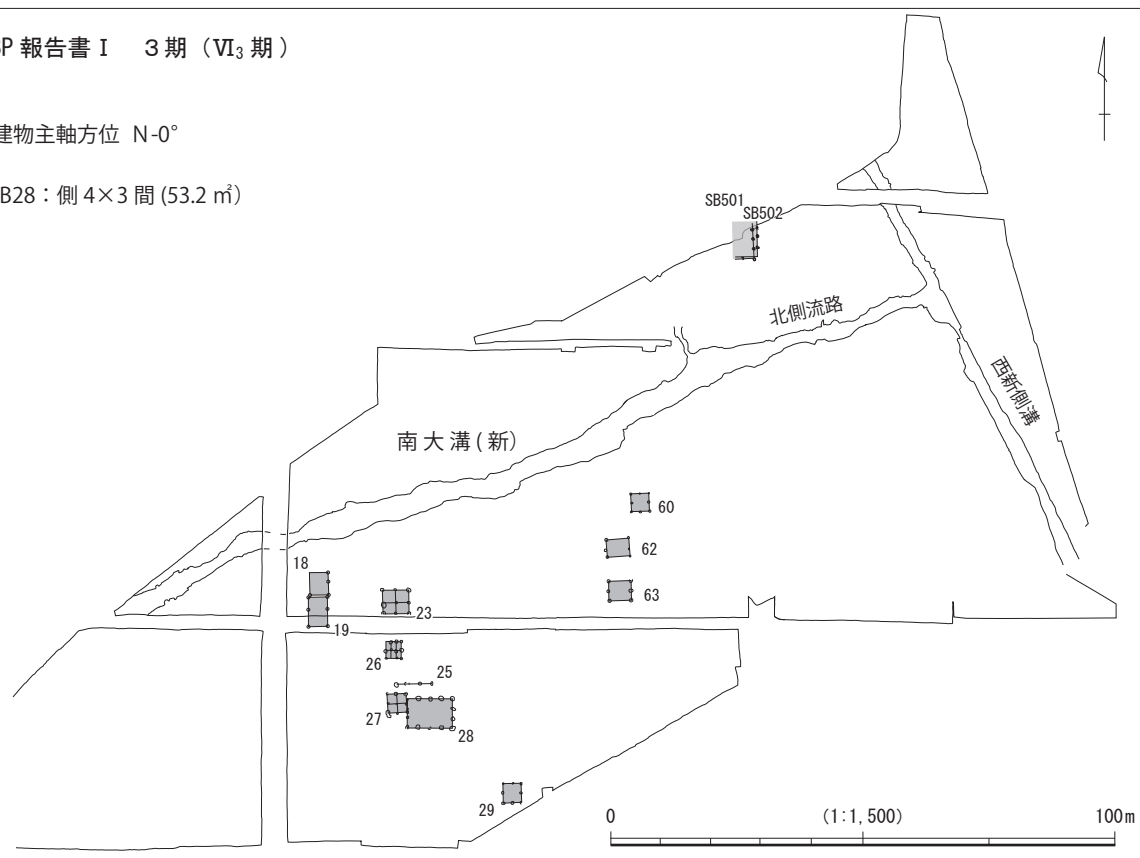
SB65 : 側 3×3・2 間 (36.4 m²)



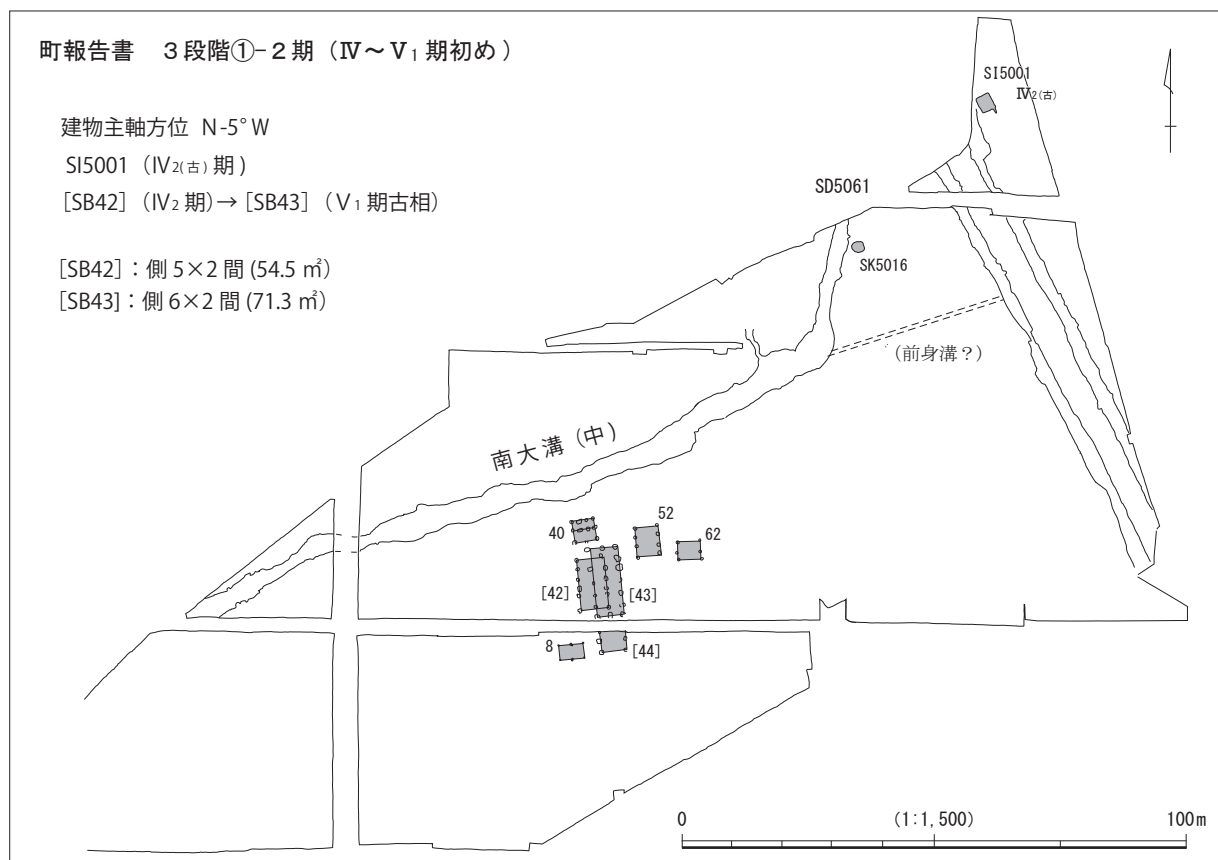
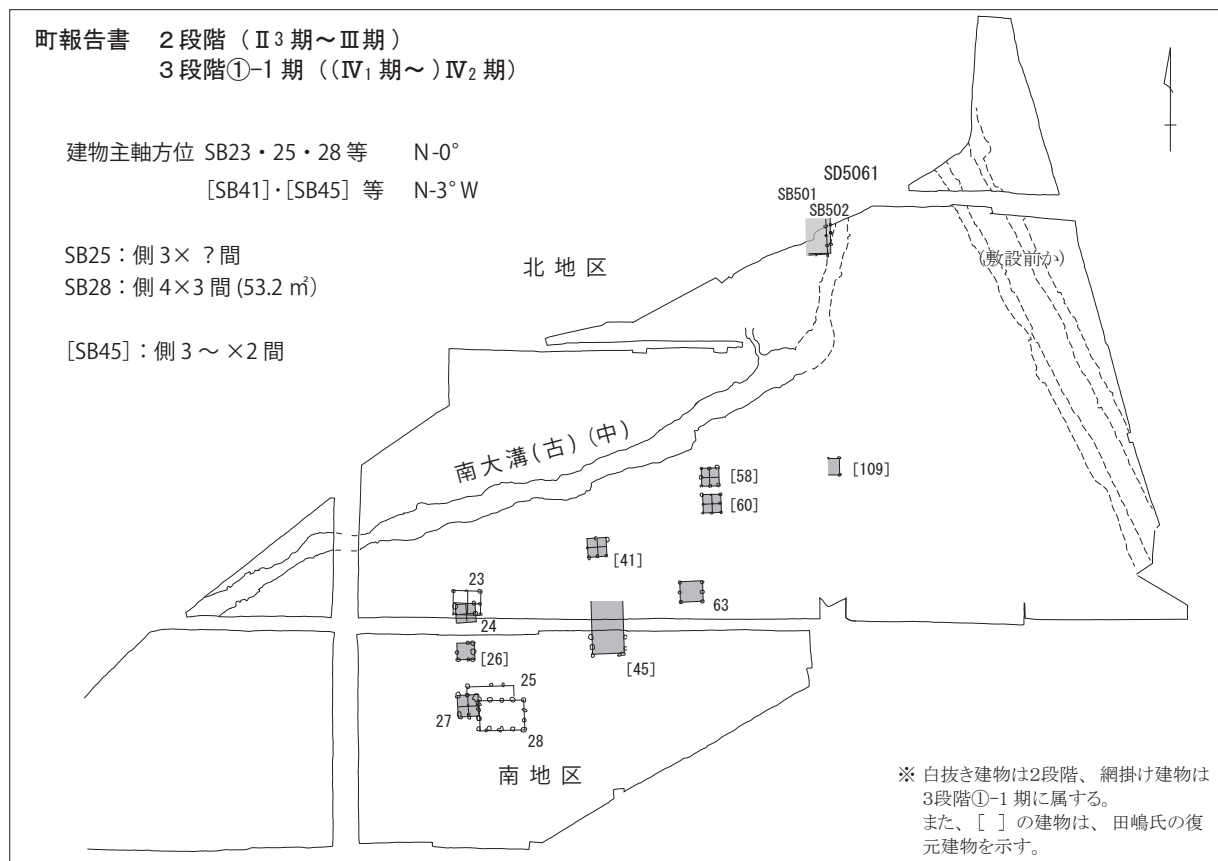
県 BP 報告書 I 3 期 (VI₃ 期)

建物主軸方位 N-0°

SB28 : 側 4×3 間 (53.2 m²)



第7図 南大溝地区の県BP報告書I変遷案2(S=1/1,500)

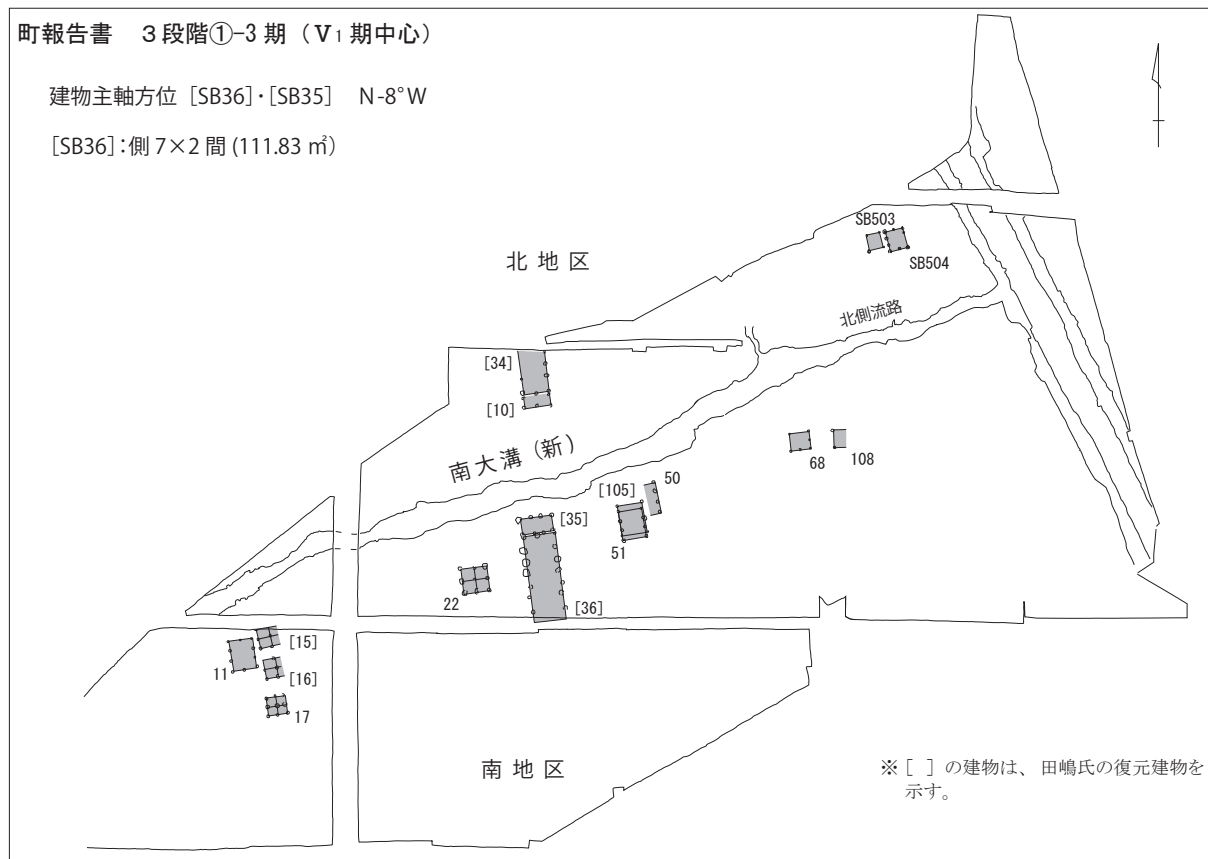


第8図 南大溝地区の町報告書変遷案1 (S=1/1,500)

町報告書 3段階①-3期 (V₁ 期中心)

建物主軸方位 [SB36]・[SB35] N-8°W

[SB36]:側7×2間(111.83 m²)



町報告書 3段階② (V₂ 期～VI₂ 期)

建物主軸方位 N-14～17°W

[SB48]・[SB47] (V₂期～VI₁期)

↓
[SB65] (VI₁期中心、一部VI₂期)

↓
SB71・SB72 (VI₂期)

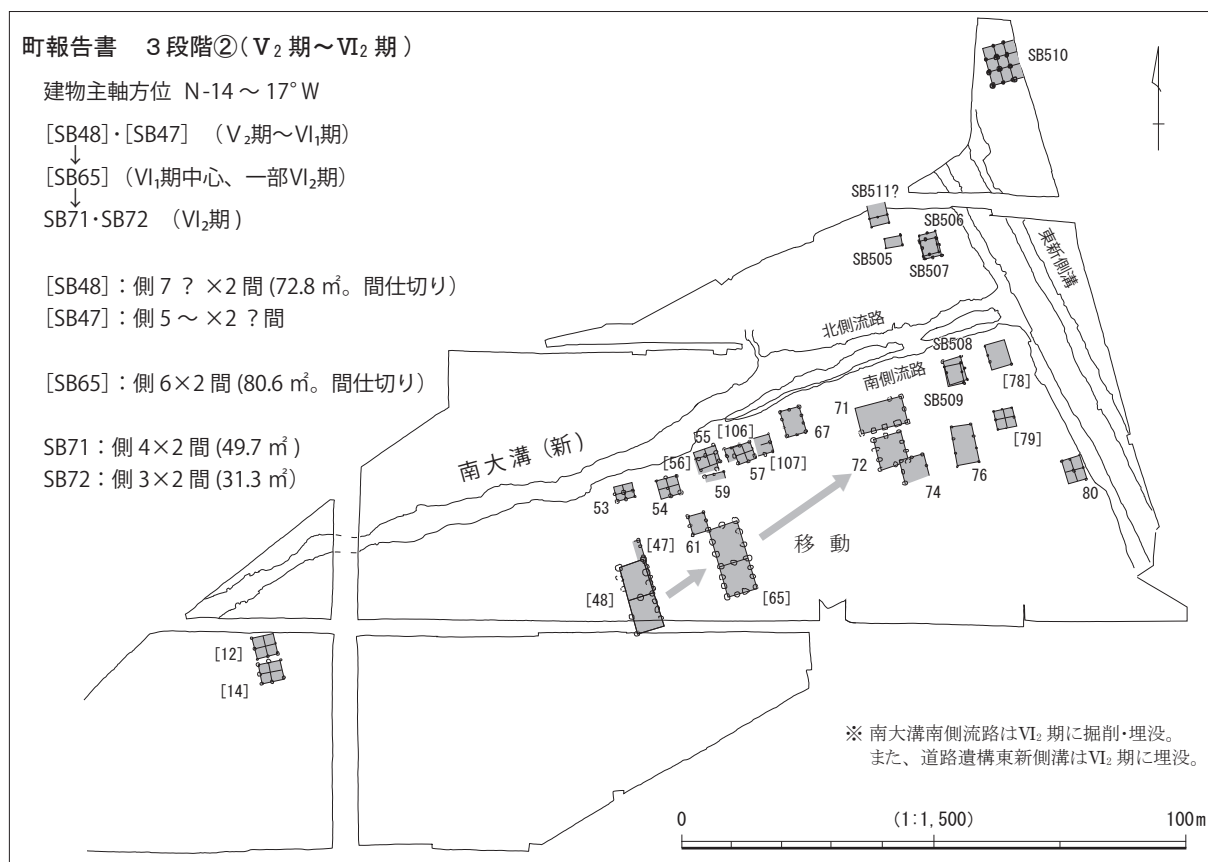
[SB48]:側7?×2間(72.8 m²。間仕切り)

[SB47]:側5～2?間

[SB65]:側6×2間(80.6 m²。間仕切り)

SB71:側4×2間(49.7 m²)

SB72:側3×2間(31.3 m²)



第9図 南大溝地区の町報告書変遷案2(S=1/1,500)

に細分されている。2期前半の主屋級の建物は、SB46～49建物群(V期初頭)、次いでSB71と変遷し、南地区の建物中心域が約20m東に移動する。規模は、短い期間に建て替えるSB46(側4×3間)が43.7㎡、SB47(側5×3間)が55.2㎡を、SB71(側4×2間)が49.7㎡を測り、南面するSB71は南地区の大きな転換を示唆するものとなる。2期後半の主屋級建物は、SB72・73(重複)から西遷し、SB64・65(併存)に移る。建物規模は、SB72(側3×2間、31.3㎡)、SB73(側4×2間、38.6㎡)、SB64(側2×2間、32.1㎡)、SB65(3×3・2間、36.4㎡)と、前期よりかなり縮小する。氏の案は、VI1期・VI2期の南地区における墨書土器を含む大量の土器出土状況に比して、建物規模がかなり貧弱な印象を受ける。また、第5次SB510(総柱倉庫)に象徴される道路遺構北東域での建物群の検出(県BP7次調査)から、南大溝地区の集落構造が大きく再編・移動した可能性を示唆するものとなる。浜崎3期は、官道としての道路遺構が廃絶するVI3期に設定され、建物主軸方位はN-0°前後を示す(第7図)。主屋級建物としてSB28(側4×3間、53.2㎡)をあて、南地区で自立的に立地する2つの建物グループを復元する。これまでの律令制下の集落とは全く異なる、名田経営をおこなう富裕百姓層の屋敷地への転換をみてとることが可能と考える一方、当期の南地区出土遺物が県縦断調査に比して少なく、VI3期の建物群展開には疑問を残す。

次に、田嶋氏は、南地区の掘立柱建物について、当センター内での加茂遺跡検討会での検討を踏まえ、浜崎氏とはかなり異なる建物復元、変遷案を提示する(第8・9図)。詳しくは氏の論考を参照されたいが、特に内部の機能差を反映した柱間寸法差を許容する主屋級建物の復元、また2×2間建物を総柱構造とする点で差異が大きい(第3表)。氏は、南大溝地区の推移を5段階(加茂1～5期)と整理、うち2段階(加茂2期)、3段階(加茂3期)が該当する。2段階(Ⅱ3期～Ⅲ期)は、正方位をもつSB25・28(SB28:側4×3間、53.2㎡)を主屋とする総柱倉庫を伴う建物グループをあてる。公的性格を示唆しつつ、以降の時期と建物構造・建物群構成とは異なる点を指摘する。また、3段階との間に空白期間の有無が課題としており、前述の南大溝(古)(中)の推移を考慮すれば、比較的短い一定の空白期間を想定すべきと考える。

3段階(Ⅳ～Ⅵ2期)は、①-1期、①-2期(2小期)、①-3期、②期(3小期)の7回の変遷案を提示し、浜崎3期(Ⅵ3期)には建物群は展開しないとする。また、②期の最終小期以外は、「無廂長舎の主屋級建物1棟+2棟一対の倉庫(総2×2間)+付属屋」からなる建物構成を標準に推移する。主屋級建物は、①-1期(Ⅳ2期以前)が〔SB45〕(3～×2間)、①-2期が〔SB42〕(側5×2間、54.5㎡。Ⅳ2期)→〔SB43〕(側6×2間、71.3㎡。Ⅴ1期古相)、①-3期が〔SB36〕(側7×2間、111.8㎡。Ⅴ1期中心)と推移する。続く②期は、Ⅴ2期～Ⅵ1期に〔SB48〕(7?×2間、72.8㎡。間仕切り)・〔SB47〕(5～×2?間)→〔SB65〕(側6×2間、80.6㎡。間仕切り。Ⅵ1期中心)→Ⅵ2期の〔SB71〕(側4×2間、49.7㎡)+〔SB72〕(側3×2間、31.3㎡)と変遷する。氏の変遷案では、3段階はおおむね桁行6間以上の長舎建物を中核とした建て替えを継承、南地区全体の一体的土地占有と安定的な継続性を示すものといえる。建物群構成の変化は、東遷して2棟で機能分担をおこなう非長舎建物〔SB71・72〕となる段階にみてとれ、浜崎氏のⅤ期より遅れることとなる。筆者は、両氏の案について総柱構造の倉庫復元を留保しつつ、大枠で田嶋氏の建物復元・変遷案を支持したいと考える。

5. 終わりに

以上、加茂遺跡南大溝地区の主要遺構について雑駁に記してきた。本遺跡の県・町の一連の調査は、多年度に及ぶため、遺構相互の関係や全体像を把握しにくい状況にあり、南大溝地区の集落構造・変遷に関しても、必ずしも再検討・評価が進んでいるとはいえない。発掘調査報告書という2次資料を基にした再検討に大きな限界をもつことを十分認識しつつも、本遺跡発掘調査に従事した一人

第4表 南大溝地区主要遺構変遷概念的試案

土器時期区分		Ⅱ3期	Ⅲ期	Ⅳ1期	Ⅳ2(古)期	Ⅳ2(新)期	V1期	V2期	Ⅵ1期	Ⅵ2期	Ⅵ3期	Ⅶ期	
曆年代		700					800			900			
南大溝	南大溝	南大溝(古)		埋没	空白期？	南大溝(中)		一部埋立/流路付替	南大溝(新)				埋没
	北側流路					(前身溝？)		新掘					
	南側流路								掘削・埋没				
道路遺構	路面			敷設時期不明瞭	旧側溝段階		路面幅縮小？	新側溝段階		盛土	埋没	道路機能維持	
	東側溝									改修			
	西側溝									南大溝(新)と基幹水路を兼ねる			修
南区建物群	田嶋氏段階	2段階		空白期？	3段階①-1期		①-2期	①-3期	3段階②		建物域移動		
	主軸方位	N-0°			N-3° W → N-5° W → N-8° W		→ N-14~17° W						
	主屋級建物	[SB28]・[SB25]			[SB45]→[SB42] [SB43]→[SB36]		→[SB47・48] →[SB65]→SB71・72						
耕作地(畠地)											畠地化		

として、現時点での自分なりの整理を試みたつもりである。県BP8次調査等の隣接調査の正報告を待つ部分も多いが、浜崎氏に倣って現時点での整理結果を第4表に示した。本遺跡の今後の活発な検討や理解促進の一助になれば幸いである。末文ではあるが、今回、膨大な内容をもつ県BP1~4次調査を執筆された浜崎氏に大いに敬意を表したい。また、引用した調査成果について十分咀嚼できなかった部分が少なからずあると思われるが、本稿の主目的を鑑み御海容をお願いしたい。

註

- (1) 本田秀生・浜崎悟司・山川史子2009『津幡町加茂遺跡Ⅰ』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
- (2) 戸谷邦隆・中嶋徹郎他2009『加茂・加茂廃寺遺跡 詳細分布調査(第1~14調査区)発掘調査報告書』津幡町教育委員会
- (3) 戸谷邦隆・吉岡康暢・田嶋明人他2012『加茂・加茂廃寺遺跡 詳細分布調査(第1~21調査区)発掘調査報告書』津幡町教育委員会
- (4) 岩瀬由美・林大智・和田龍介他2018『津幡町加茂遺跡・加茂窯跡群』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
- (5) 川畑 誠・和田龍介他2021『津幡町加茂遺跡Ⅱ』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
- (6) 和田龍介他2021『津幡町加茂遺跡Ⅲ』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
- (7) 執筆者である浜崎悟司氏に確認したところ、道路遺構の縮小をⅣ2(新)~Ⅴ1期(画期2)との理解であり、第1表の一部を改変した。
- (8) 年代観は、田嶋明人氏の編年(田嶋明人1988「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題 報告編』石川考古学研究会・北陸古代土器研究会、同2013「平安期土器の暦年代と横江荘遺跡の変遷」『加賀 横江荘遺跡』白山市・白山市教育委員会)を基に作表した。
- (9) 県BP報告書Ⅰ第81図西側溝断面Lで旧溝・新溝が明示されている(第4図断面D)。県BP5次調査では、近接する位置で、旧溝とされた堆積層から多量のⅥ2期遺物が出土する。報告書Ⅰの事実誤認と考える。
- (10) 註(1)文献および註(3)文献(田嶋明人「南大溝域の掘立柱建物」)。なお、第6~9図には、両氏の建物変遷案に加えて今回指摘した南大溝、道路遺構の変遷試案を併せて表示している。